ふじみがおか

杉並区立富士見丘小学校

Fujimigaoka
Elementary school

校長　竹内　明子

令和5年6月号

「学校」

校長　竹内　明子

先日のことです。
「こうちょう　せんせーい！」
と可愛らしい声で、朝の登校時に1年生の子どもが2～3人、抱きついてきました。
「はあーい。たのしそうですね。」
と言うと、
「こうちょうせんせいが　いたから！」と、その場でピョンピョンと跳びはねました。

何とも可愛らしくほほえましいその1シーンは、子どもたちから私への、まるでプレゼントのように思われました。この年齢の子どもというのは、身近な大人が大好きですから、校長の私でなくとも、抱きつきたい大人はたくさんいるのかもしれませんが。

子どもの純粋さや素直さを感じる場面は、学年を問わず、本校のいたるところで見かけます。子どもたちのそのような笑顔はもちろん、成長する姿や団結して取り組む場面に接したとき、教員は教員としてしか味わえない感動や充実感をおぼえるものです。そのほか、様々な葛藤や苦難を子どもたちと共に乗り越える時、我々は子どもと共に成長するのだ、とも感じます。

約三年間続いたコロナ対応では、子どもと子ども、子どもと大人が接する際に一定の距離がとられ、心の距離もそれに比例することがあったと感じました。マスクで隠れている相手の表情や感情を読み取りにくい状況もあり、心の発達上の心配もしました。

しかし、国のコロナ政策の転換から約一月が経過し、学校でも人と人との距離が正常に戻ってきたと感じています。上述のエピソードは、そのうちの一つです。

ところで、先週、グループウェアの開発・販売・運用をしている企業を見学する機会がありました。この企業の会議はほとんどがオンライン会議で、国内・海外の社員問わず、瞬時に打ち合わせをすることが日常となって働きやすさが向上しているとのことでした。そして、100%に近いペーパーレス業務形態でもあり、会社のコスト面や管理面でメリットがかなり高いそうです。

そこで、「このような良好な業務形態になった反面、逆にデメリットはどんなことですか。」とお聞きしてみたところ、「社員同士の打ち合わせや会話がオンライン会議だけだと、ちょっと聞いてみたいことや雑談が気軽にしにくいので、コミュニケーション不足になることがあります。なので、『雑談タイム』だけをあえて設定することもあるんですよ。」と。

このことを子どもの生活に置き換えてみました。もしも、学校の授業がすべてオンライン授業だけだとしたらどうなるか。子どもたち同士や教員とのコミュニケーションが十分にとれず、かかわりの中で学び成長できる学校の機能が果たせなくなるのは明白です。子どもの成長において何かが失われ、未来でも何かが欠けてしまうかもしれません。毎日の学校で、人と人とがふれあい、かかわりあって成長することの大切さに、あらためて思いを馳せる機会となりました。

また、学校事務上では、まだまだペーパー文化が残っています。迅速性やご家庭への確実な配布、それにSDGsへの配慮から、本校では保護者あて文書を電子配信する方策を執っています。しかし、学校業務全体のペーパー削減においては、まだまだ理想に届いていませんので、今後の工夫が課題です。

話が少し逸れましたが、私が最もお伝えしたいことは、学校という場所は、人と人とが温かくふれあい、かかわりあえる場所であり、学校はそうでなくてはならない、ということです。そして、いろいろな人の考えや行動に直接触れ、人と人とが直接対峙できる教育活動が一層必要だということです。

美術館で鑑賞した一枚の絵画が、画集や映像から受けた印象とは全く違うものだった、というのは、私の実体験です。直接触れたものと間接的に触れたものとでは、一見同じように見えるかもしれませんが、その色や質感、画家の筆づかい・息づかいなどの魂は、本物に触れることからのみ得られると思うのです。

学校も本質は同じなのです。